

吐夢の部屋

～『業音』の巻～



第3回 ゲスト：平岩紙

初演に続いて『業音』に参加する平岩紙が登場！今作の主人公・土屋みどりを演じる彼女に宮崎吐夢が迫ります。
(※この対談の完全版は劇場で販売する『業音』公演パンフレットに収録します。)

吐夢 今回の再演って、どういう経緯で決まったのか知ってる？

平岩 松尾さんは何年も前から「『業音』をやりたいんだ」って言ってましたよね。

吐夢 僕はそれ、聞いていなかったのだけれど、「荻野目さんの役をやってほしい」って言われたの？

平岩 「もし『業音』をやるとしたら、どう？」って。そのときは「いやいや、無理ですよ！」って言ったんですけど。

吐夢 どうして無理だと思ったの？

平岩 荻野目さんが演じた役を自分が演じるなんて、できないと思って。「私、荻野目慶子です」ってセリフで始まる芝居だから、「『私、平岩紙です』で始まって、ずっこけません？」って。「そこはまあ、変えるけど」っておっしゃってましたけど、そのときは全然無理でした。

吐夢 なのに、やろうと思えたのは何故？ そろそろ年貢の納め時、みたいな？

平岩 最初に言われてから3年後ぐらいに、松尾さんから「やっぱり『業音』をやりたい。これをやらないと演出家として死にきれない」みたいなことを言われて、本気で考え始めたんです。松尾さんはほんっとにやりたいんだなって思ったし、自分も年齢とともに凶太くなって、昔ほど細かいことを考えないようになっていたので、ようやく「向き合ってもいいかな、挑戦してもいいかな」って気持ちになったんですよね。やってみないとわか

らないかなって。

吐夢 僕、『ドブの輝き』っていう、松尾さんと宮藤（官九郎）さんの2本立てに井口昇さんの映像が挟まる公演のときに、松尾さんが書いた「アイドルをさがせ」のほうで一応主役っぽい役をやったじゃないですか。

平岩 そうでしたね。

吐夢 主役なんてとても無理だろうってプレッシャーに押しつぶされそうになってたんだけど、いざやってみたら、主人公って行動原理とか心情の流れが全部、台本に書いてあるから何も考えなくてよくて、すごくラクだったのね。いや、長台詞とかもあったし、もちろん大変は大変なんだけど（笑）。今までの飛び道具的な役に比べて、台本の余白を自分で埋める必要がなくて、いるだけでいいというか、主役って意外と何もしなくていいんだなあって思ったんですよね。

平岩 ああ～、確かにそれは感じますね。「なんかやんなきゃ感」がないかもしれない。今回の『業音』で言うと、次から次へと面白い人たちがまわりに出てきて、私は受け身だから、そういえば変なプレッシャーがないかも、と思います。

吐夢 だから、主役をやらせてもらえるなら、無理だなと思ってもとりあえずやってみたほうがいいですよ。見える景色が違うから。って今、僕はどんな立場で言ってるのかわからないんですけど（笑）。

平岩 （笑）そうですね。謙遜ばかりする必要はないなと思います。自分が大人計画で主役をすることはないと
思っていましたけど……。

（※この対談の完全版は劇場で販売する『業音』公演パンフレットに収録します。）